

小林秀雄全集

第八卷



無常といふ事・モーツァルト

無常といふ事 蘇我馬子の墓
モーツァルト 年齢
表現について 金閣焼亡

小林秀雄全集
第八卷

無常といふ事・モオツァルト

新潮社版

小林秀雄全集第一卷

様々なる意匠



昭和四十二年十一月二十日 發行
昭和五十二年三月十日 八刷

定價 三千圓

著者 小林秀雄

發行者 佐藤亮一

印刷者 塚田重

印刷所 塚田印刷株式會社

寫眞版印刷 半七寫眞_{工業}印刷株式會社

製本所 新宿加藤製本

發行所 株式會社 新潮社

東京都新宿區矢來町七一
電話東京(03)五一二(業務部)

東京(03)五四一一(編集部)

振替東京四六六番 郵便番號一六二

(亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付)
下さい。送料小社負擔にてお取替へいたします。



ランゲ《モーツァルト》



ロダン《モーツァルト》

無常といふ事・モオツァルト

小林秀雄全集第八卷

編輯

大江
藤淳

中村
光夫

大岡
昇平

第八卷

目次

無常といふ事

當麻……………一三

、無常といふ事……………一七

、平家物語……………二〇

、徒然草……………二四

西行……………二七

實朝……………三〇

モオツアルト

バツハ……………三六

モオツアルト……………三七

表現について……………三七

メニューヒンを聴いて……………三七

ヴァイオリニスト……………三六

蓄音機	一六八
ペレアスとメリザンド	一七〇
パイロイトにて	一六〇

感想 IV

嵯峨澤にて	一六六
現代文學の診断	一六九
死體寫眞或は死體について	一七三
翻譯	一七六
文化について	一八〇
同姓同名	一八五
吉田滿の「戦艦大和の最期」	一八七
知識階級について	一八八
秋	一九〇
醉漢	一九五

「きけわだつみのこゑ」	100
感想	101
蘇我馬子の墓	105
詩について	114
信仰について	113
年齢	114
人物評	113
金閣焼亡	115
瓢鮎圖	116
感想	116
感想	110
作家論 Ⅳ	
眞船君のこと	115
菊池さんの思ひ出	117

横光さんのこと	二六〇
島木君の思ひ出	二六三
「キティ颱風」を読む	二六五
「ひかげの花」	二六七
「武藏野夫人」	二六八
菊池寛	二七四
「菊池寛文學全集」解説	二七七

西洋作家論 Ⅱ

チエホフ	二〇一
トルストイ	二〇九
或る夜の感想	三一
辰野隆譯「フィガロの結婚」を読む	三九
好色文學	三三
「ベスト」	三九

ニイチエ雜感	三〇一
「ヘツダ・ガブラー」	三〇三
小説	三〇四
エリオット	三〇七

後記

解説	江藤 淳	三七三
解説	吉田 瀨生	三六一

無常といふ事

當麻

梅若の能樂堂で、萬三郎の當麻たえまを見た。

僕は、星が輝き、雪が消え残つた夜道を歩いてゐた。何故、あの夢を破る様な笛の音や大鼓おほかの音が、いつまでも耳に残るのであらうか。夢はまさしく破られたのではあるまいか。白い袖が踊り、金色の冠がきらめき、中將姫は、未だ眼の前を舞つてゐる様子であつた。それは快感の持續といふ様なものとは、何か全く違つたものの様に思はれた。あれは一體何んだつたのだらうか、何んと名付けたらよいのだらう、笛の音と一緒にツツツと動き出したあの二つの眞つ白な足袋は。いや、世阿彌は、はつきり當麻と名付けた筈だ。してみると、自分は信じてゐるのかな、世阿彌といふ人物を、世阿彌といふ詩魂を。突然浮んだこの考へは、僕を驚かした。

當麻寺に詣でた念佛僧が、折からこの寺に法事に訪れた老尼から、昔、中將姫がこの山に籠り、念佛三昧のうちに、正身の彌陀の來迎を拜したといふ寺の緣起を聞く、老尼は物語るうちに、嘗て中將姫の手引きをした化尼と變じて消え、中將姫の精魂が現れて舞ふ。音楽と踊りと歌との最少限度の形式、音楽は叫び聲の様なものとなり、踊りは日常の起居の様なものとなり、歌は祈りの連續の様なものになつて了つてゐる。そして、さういふものが、これでいゝのだ、他に何が必要なのか、と僕に絶えず囁いてゐる様であつた。音と形との單純な執拗な流れに、僕は次第に説得され征服されて行く様に思へた。最初のうちは、念佛僧の一人は、麻雀がうまさうな顔付きをしてゐるなどと思つてゐたの

だが。

老尼が、くすんだ董色の被風を着て、杖をつき、橋懸りに現れた。眞つ白な御高祖頭巾の合ひ間から、灰色の眼鼻を少しばかり覗かせてゐるのだが、それが、何かが化けた様な妙な印象を與へ、僕は其處から眼を外らす事が出来なかつた。僅かに能面の眼鼻が覗いてゐるといふ風には見え、例へば仔猫の屍骸めいたものが二つ三つ重なり合ひ、風呂敷包みの間から、覗いて見えるといふ風な感じを起させた。何故そんな聯想が浮んだのかわからなかつた。僕が、漠然と豫感したとほり、婆さんは、何にもこれと言つて格別な事もせず、言ひもしなかつた。含み聲でよく解らぬが、念佛をとこなへてゐるのが一番ましなんだぞ、といふ様な事を言ふらしかつた。要するに、自分の顔が、念佛僧にも觀客にもとつくりと見せ度いらしかつた。

勿論、仔猫の屍骸なぞと馬鹿々々しい事だ、と言つてあんな顔を何んだと言へばいゝのか。間狂言になり、場内はざわめいてゐた。どうして、みんなあんな奇怪な顔に見入つてゐたのだらう。念の入つたひねくれた工夫。併し、あの強い何んとも言へぬ印象を疑ふわけにはいかぬ、化かされてゐたとは思へぬ。何故、眼が離せなかつたのだらう。この場内には、ずる分顔が集つてゐるが、眼が離せない様な面白い顔が、一つもなさうではないか。どれもこれも何んといふ不安定な退屈な表情だらう。さう考へてゐる自分にしたところが、今どんな馬鹿々々しい顔を人前に曝してゐるか、僕の知つた事でないとするれば、自分の顔に責任が持てる様な者はまづ一人もゐないといふ事になる。而も、お互に相手の表情なぞ讀み合つては得々としてゐる。滑稽な果敢無い話である。幾時ごろから、僕等は、そんな面倒な情無い状態に墮落したのだらう。さう古い事ではあるまい。現に眼の前の舞臺は、着物を着る以上お面も被つた方がよいといふ、さういふ人生が先だつてまで嚴存してゐた事を語つてゐる。